

40万円のチョコレート

函館校 地域協働専攻 国際協働グループ
2年 虻川夏海

突然ですが、皆さんは40万円のチョコレートを買いたいと思いますか。そんなチョコレート見たことない、とお思いになるでしょう。私は、この南ユタ大学短期プログラムの3週間の初めに、真っ先にこの言葉が浮かびました。見かけの包装紙や、以前から聞いていた評判からは美味しそうで最高なのに、口に入れた途端、苦くて食べられそうにない。もちろん、人によって味覚は様々です。同じものを食べても、まったく異なる感想を持つことはよくあることです。

初めに、私たちはアメリカに入国することすら苦労しました。まず、ホームステイ先の情報が、家族と同じホームステイ先の教育大生の名前だけしか知らされていませんでした。ラスベガスの空港で、入国するために書く申請書には「住所」の欄を埋める必要がありました。私たちは、事前に南ユタ大学と書けば良いと教えられましたが、実際はそれでは不十分でした。何かの手違いが重なったのか分かりませんが、外部に電話もまともにかけることが出来ない中、学生たちだけで対処したのは今考えてもあっぱれであり、同時に恐ろしいです。ある意味恐怖体験でした。自分ひとりでは、入国は不可能だったと思います。

次に、授業の流れを説明していきます。平日の午前中はESLクラスという授業があり、9時から12時まで外国人の先生1人と日本人14人で行いました。先生の英語は聞き取れないことのほうが大半で、英語が出来る人から教えてもらうことが多かったです。特に宿題に関する発言は聞き漏らさないようにと、集中していたつもりですがやはり難しかったです。生徒同士でペアになり、アイスブレイクを作って実演しあった授業は印象的で楽しかったです。午後は日によって様々なアクティビティがありました。ネイティブアメリカンの方の前でプレゼンテーションしたり、小学校の子供たちと交流しつつ日本文化のプレゼンをしたり、日本文化について発表する機会が3回ありました。ブライスキャニオンは、平日の特別行事でした。途中雷や雨も降りました。ハイキングシューズが必要と聞いていましたが、よほど歩きにくい靴でなければ、履きなれた靴でも問題ないと思います。話は戻りますが、平日は5時に授業が終わります。そこからホームステイ先の家族が大学まで迎えに来てくれていました。

ここからは、ホームステイ先のシェークスピア家について記述していきます。私のホー

ムステイ先には、お母さん、お父さん、サウジアラビアから来た留学生がいました。子どもやペットなどはいませんでした。代わりに、前半はおばあちゃんの家にはほぼ毎日通いました。私を含めて日本人2人でお世話になりましたが、子どもがいないのは本当に残念でした。事前にアンケート欄に、子どもが好きかどうかくらい聞いてほしいレベルで悲しかったです。特に、私と一緒にステイしていた友人は子どもが大好きな人だったので、尚更つらいものがありました。平日、学校がある日はまだ良かったのですが、土日は家に誰もいないため、あまりにもすることがなく、日本人二人で折り紙を折る日もありました。アメリカに来て、二人で家のテレビで映画をずっと見る日もありました。お母さん、お父さんは本当に良い人なのは間違いないです。ですが、二人とも忙しく、家に居ないことがほとんどで、遠出するのは困難でした。サウジアラビアの留学生がドライブに連れて行ってくれたのは本当に良い思い出です。また、ユタは聞いていたとおり治安が良いです。退屈な夜、日本人二人で散歩に出かけたときも、人々は親切に道を教えてくれました。ホームステイ先の食べ物についても書いておきます。私たちの家族は、過去にも台湾や韓国、中国からの留学生の受け入れ経験がありました。そして彼女たちが置いていったと思われる韓国食品、これと友人が日本から持参してきたレトルトごはんやカレーなどが食卓に上がることが多かったです。朝にマルちゃんラーメンをはしで食べた日や、ディナーで韓国の激辛ツナ缶を食べた日はここが何処なのか分からなくなりました。お母さんの手料理は、私の家では本当にレアでした。一度、ホームステイ先で肉じゃがを振舞ったときは本当に喜ばれました。おすすめです。ホームステイ先に限らず、空港の機内食から食べ物には恵まれていました。特に大学内のピザとポテト、シェークは一度だけでも食べてほしいです。ユタの食べ物だけでもレポートが作れるほどです。



↑ 休日のパレード



↑ 大学内の BBQ ピザと青々しい飲み物

冒頭に、私はチョコレートのことを書きましたが、私にもチョコレートを甘く感じた瞬間はありました。教会の B.B.Q に参加して、16歳の少年と拙い英語で会話したとき、テコンドーで子供たちと触れ合った日、大学でアメリカの生徒と身振り手振りコミュニケーションを図ったとき、自ら動いて話して根性を見せたときだけ、私はここにきた意味を見出すことが出来ました。初めて車から聞こえてくる音楽が陽気に聞こえました。外部の人から、これはどんなに貴重な体験だと言われても、チョコレートは決して甘くなりはず

せん。ユタの乾燥した気候で、私は何度も鼻血を流しましたし体調も不調でした。体も思うようについていかず、正直気持ちも優れない日があったのも事実です。誰も居ない物陰があるならば、すぐにでも泣いてしまいたい日がありました。ですが、こうやって外国の人と話すことや、家に帰って友達と毎晩話すこと、学校で話す友人が心の支えでした。この報告書を読んでくださった方はお気づきのことと思いますが、40万円とはこの3週間にかかった費用のことです。このプログラムに参加を考えている方の未来が明るいことを、切に願っています。最後になりますが、シェークスピア家、このプログラムに参加した13人はじめ、書ききれないほどお世話になった人、全ての縁に感謝しています。どうもありがとうございました。



↑校内にある卒業生だけが通ることを許されたタワー。そのことに気付いたのはくぐってからでした。